

ウルトラQ dark fantasy

ヒトガタ

第三稿

脚本／小中千昭

Teleplay by Chiaki J. Konaka

2004\06\14

登場人物

門野 美彦……………高等遊民／哲学者

雛……………人形

木下京子……………メイド／私的助手

真柄太郎……………瘋癲老人／元帝大教授

渡来角之進……………帝都大学理工学部教授

ナレーター

○時計仕掛けの世界

N 「人が人形に恋をする——。ギリシャの昔より、そうした物語は存在しています。けれどこれからお見せする物語は、もっと歪んだ世界のお話かもしれません——」

○橋／未明

昭和の時代に取り残された街。空が白む頃。橋に向かって歩いてくる若い男、門野。と、橋の中途に何か黒いものが、染みの様に地面にこびりついているのが見えた。

それは顔を真下に向けうつ伏すインバネスの男。傍らには、大きな革のトランクが倒れている。

動かない男の側に立ち、見下ろしていた門田、屈み込んで、うつ伏す者の顔を覗く。

凝固した血の上、陰の中にある死した老人の顔。

関心を失い、立ち上がった門野、その場を立ち去ろうとした時、老人の脇のトランクに目をやる。

好奇心を抑えられず、そのトランクを開けてみる。少し蓋が既に開いているその中には、少女がいた。

門野「！」

否、それは少女の姿をした、等身大の人形だった。虚ろに目を開け、四肢を折り曲げ、赤いビロードの内張りがされたトランクの中に収まっている。

○未明の街

トランクを重そうに持ち、足早に歩く門野。

旧家の一軒である己の家に入っていく。

○門野の室内

旧家の土蔵。黴臭い古書が詰まった棚と棚の間の空

間が彼の居室。

トランクを持ち込み、開く門野。

門野「……」

薄目を開け、身を丸めている人形を門野は暫し見入っていたが——、それを中から取り出し椅子に座らせようとする。

門野「(眩き漏らす)重いな……」

弛緩した姿態で椅子に座り、俯いている人形。数歩離れ、人形を見つめている門野。

書架にある本の背表紙の前には、門野が蒐集した毒薬の粉末や液体、多種多様な薬瓶が置かれている。と——、部屋の入り口に立つ人影。

メイドの若い女——京子が、門野に目を合わせず静かに存在を報せている。

門野「……」

無言のまま部屋を出て行く門野。

○同／食堂

考え事をしながら食事をしている門野。

京子は部屋の隅に立ち茶を注ぎ足す時を待っている。咀嚼しながら門野、手元にいつも用意してあるメモ紙に走り書きし、紅茶で嚙下して椅子から立つ。

京子、メモを無表情に見下ろす。

「夕刊 / 煙草 / (シエリー酒銘柄)」

京子「……」

○門野の部屋

人形に背を向ける格好で、机に向かい本を読んでいる門野。

背後より視線を感じ、振り向く。

門野「！」

俯いていた筈の人形の顔がこちらを向き、門野を見

つめているかの様。

門野「——（平静を取り戻し）お前は何という名だ」

門野、立ち上がって人形の前にゆっくりと近づく。

門野「僕は——、門野。全ての判断を停止して死ぬ時を待っているだけの男だ。学生の時に書いたデカルトをネタにした論文が、何故か受けてね、ポストモダニズムとやらの旗手に担ぎ上げられ——、全てがくだらなくなっ、ここに住み着いている」

人形は、当然ながら答えない。

門野「どうしてお前の主人は、お前をトランクに詰めて持ち歩いていったんだ？」

人形「……」

門野、思案。

門野「デカルトは、妾腹の娘、フランシーヌが早逝したのを嘆き悲しみ、そっくりな自動人形を作って持ち歩いていたという伝説がある。お前の主人はその真似でもしていたのか……」

と——、微かに聞こえだす、音。

門野「……？」

正確に反復する何かの鼓動。それは人形から聞こえている。門野、耳を人形の躰に近づけ聴く。

○旧家の家並み

薄暗くなってきた路地を、新聞などを買ってきた京子が家に戻っていく。

○門野の部屋

トランクの中を探る門野。だが何も見当たらない。と、すっと床に差し出される夕刊。

門野「——」

京子は決してこの部屋に入らない。許されていない。門野、夕刊を受け取ってすぐさま広げる。

お悔やみ欄に、老人のぼけた写真。

門野「(モノ)元帝大教授真柄太郎、心臓発作で急死……」

門野、人形を見下ろす。

門野「——お前にも哀しみはあるのか……？ お前を愛したで

あろう者はもうこの世にいなかった」

人形「……(微かな鼓動を聞かせるのみ)」

幼女のような、成熟した女の様でもある人形の貌。

それを見つめる内に門野は息苦しくなるのを自覚する。心惹かれつつある自己を否定し、視線を逸らす。

○門野の部屋／夜

部屋の外から、着替えた京子が声をかける。

京子「今日はこれで失礼します」

門野「——」

頭を下げ、出て行く京子。

机にあるワークステーションの液晶モニタに見入り、マウスを動かしている門野。本体は何処かに押し込められており、机には小さなキーボードがあるだけ。帝都大学のサイト／教授リスト

門野「(呻く)」

真柄太郎教授の項は、完全に空白だった。新聞のぼけた顔写真——。

門野「——」

○イメエジ

何処とも知れぬ街中。

人形が入ったトランクを重そうに持ちながら、道行く人々の中に消えていく老人の姿——。

橋の上に倒れている真柄博士。未だ息絶えていない。

胸の激痛に握り締められた拳が震える。

真柄老人の視線の先には、トランク。

薄く蓋が開いている。その隙間から、じっと老人を見つめる人形の目――。
老人は恐怖し、そして意識が遠のいて行った――。

○門野の部屋

はっと我に返る門野。おぞましい想念に脂汗が滲む。

門野「――」

モニタ画面には、ジャケ・ドロスが作った自動人形の画像が何枚もウィンドウを開いていた。
人形の内側から聞こえてくる、鼓動――。

門野、人形に振り向く。

人形はじっと門野を凝視している。

門野「――（低く）命在る、ふりをするな――」

険しい目で人形を睨む門野――、おもむろに引き出しの一つを開く。そこには、いつ己の肉体を切り裂いても良い様に蒐集されたナイフ群。

その中で最も重く大きなものを手にとり、人形に向かっていく門野。

人形「……」

門野、無言で人形を床に引きずり倒し、馬乗りになってナイフを振り上げる。

門野「（混沌にある）僕がデカルトを援用したのは単に社会のシステムを幾何学に置き換える方法を使ったからだ！

神の実在などを基準にするデカルトの思想など今やただの邪教でしかない！」

人形「……」

門野「生きたふりをするオートマタなど役立たずのあやふや！
からくり如きなど壊してやる！」

はだける人形の胸。

振り上げた門野の持つナイフ――。

門野「（逡巡）――くっ……」

門野、ナイフを棄て、人形の細い頸を両手で握り、締めつけながら人形の頭を床に幾度も打ちつける。

※1

※2

門野「とまれ！ とまれとまれええッ！」

力が抜けた門野の手から、ぐったりと落ちる人形。

門野「!？」

人形の瞳から、一筋の涙が伝い落ちる。

門野は己が為したおぞましい行為に戦慄する。

門野「――僕は、どうしてこんな事……」

門野、人形の胸に耳をつける。

それは、まだ動いている。よりはっきりとした音で。

門野の強張った表情が、次第に、安堵へ。

と――、門野の耳元に、くぐもった少女の声。

人形「(オフ)ヒナを、思って……」

ハツとなり人形の顔を見入る門野。

門野「――」

人形「(オフ)ヒナを、思ってくれたら、ヒナはここにいる」

雛の声は、昔のラジオの様にくぐもった音。

門野「――(呆然)」

○門野の家外観／午後

※4

門野「(モノ)コギト・エルゴ・スム――、デカルトは『我思

う故に我在り』と言った。雛は、思われるが故に、ここ

にいるという――。僕はそれから、散歩に出る事すらも

なくなり、本という他人の記憶に満ちた部屋の中にいる」

○門野の部屋前

盆に乗せられた軽食。一口くらいしか食べていない。

京子、やや哀しげにそれを見下ろし、下げる。

門野「(モノ)デカルトが人形のフランシーヌを作ったという

話は伝説だが、デカルトがオートマタという時計仕掛け

の人の形をしたものに強い関心を抱いていたのは事実だ。

ヴィルヴェッシューと共に、機械設備以外にも自動人形

を作ったとして不思議ではない」

※5

○門野の部屋

雛が座る椅子の許、床に座りぼんやりと天井を見上げている門野。

門野「(モノ)雛はもう一週間動き続けている。いや、文字を書くとか楽器を奏でるといった動作は何ひとつしない。ただ、生きている事を主張するかのように、心臓の音だけを響かせている——」

雛「(オフ)だって、雛は生きているのだから」

キーボードを叩き、文章を記述している門野。

その後ろ姿をじっと見つめる雛。

プリンタから吐き出される紙。

門野「(オフ)一週間前に死んだ、真柄太郎教授について調べる事。何を研究していたのか。どうして帝大の記録がなくなっているのか」

○門野の部屋前

紙に書かれた文を黙読している京子——。

門野「(オフ)雛という人形について少しでも関係があるものについては全て調べ、判ったら随時メールを入れる事」
黙って出て行く京子。

○門野の部屋

雛「(オフ)どうしてお父さまの事を知りたいの？」

門野「——(半独白)父？ 真柄教授は雛にとって父なのか」

雛「(オフ)そうよ。だから、嫉妬なんてする必要ない」

門野「嫉妬？ 僕が——？ 嫉妬だと言うのか……？」

雛「(オフ)あの女の人に、雛の事教えてもいいの？」

門野「女？ 京子は、存在しない女だ」

雛「(オフ)意味が判らない」

門野「あの女は考えないのだよ。考えない者は故に存在しない」

雛 「雛は、思われるから、ここにいるのよ」
門野 「そう——、クア・コギタートウム……」

○帝大キャンパス

学生達の中を進んでいく、京子。

○同／図書館

書架の間に立ち、論文の書を捲っている京子。

京子、ふと気配に顔を上げる。

京子が持つ本の背表紙を、顔を横にして見ている長身の男がいた。渡来教授である。

渡来 「真柄先生の論文ですな。懐かしい——」

京子 「——御存知なんですか」

渡来 「最後の教え子の一人なんです、僕は」

京子 「——」

○渡来研究室

無機的な研究室、コーヒーを出され一礼する京子。

渡来 「真柄先生は、ずっと以前に亡くなっていたと思ってたんです。いや、別に何の根拠も無かったんですがね。だから、先日亡くなったというのを聞いて意外でした……」

京子 「——真柄博士の研究は、どんなものだったんでしょう。」

あの、でも私は考えない人間ですので、伺っても理解出来ないでしょうけれど——」

言いながら京子、渡来に机の下で携帯を操作。

渡来 「寧ろ、あなたの様な人の方が理解出来たのかもしれない」
京子 「え？」

○イメエジ／旧研究室

書物が山を成す机で、ノートに細かい字や図形をび

っしりと書き込んでいる、若き日の真柄博士の背。
渡来「(オフ)人間の想念は、物理的な力場へと変換し得るの
だという理論を、真柄先生は証明しようとしていました」

真鍮の歯車が組み合わされた、構造モデルの動きを
凝視している、真柄博士の眼鏡レンズ。

渡来「(オフ)この帝大では、かつて千里眼を研究した有名な
教授が放逐されたという暗い歴史がありますね。真柄
先生もまた、ここで研究を続ける事は出来なかった……」
歯車が、止まった。

○門野の部屋

小型スピーカーから聞こえてくる渡来の声を、じっと
聞いている門野——。

渡来「(オフ/電話)真柄先生の記録があまり残っていないの
は、それが理由でしょう——」

門野「——」

○渡来研究室

じっと聞いている京子——。

京子「もし——、真柄博士のその理論が証明されたとしたら」

渡来「——(弱く苦笑)人の想念は、その人間が生きている限
り続く。その想念を受けた力場がもし存在するなら、そ
れは半永久機関の様なものです……」

京子「——真柄教授は、どちらにお住まいだったのですか」

○タクシー車内

携帯でメールを読んでいる京子。

「人形について調べる事」

京子「……」

○フラッシュ／渡来研究室

別れ際の挨拶をしている京子に

渡来「でも、どうしてそこまで真柄先生に御関心あるんでしょう、あなたの、上司の方は」

京子「――（虚無的に）多分、嫉妬、ですわ」

渡来「――」

○門野の部屋

梯子に乗り、書架を探っていた門野、一冊の本を見
つけ、取り出して降りる。

すぐさま頁を開いていく。

オルフィレウスの永久機関の図版。

門野「（モノ）真柄教授が作ろうとしていたのは、人の想念を
物理的な力へと転換するシステム――。まさに半永久機
関、狂人の妄想――。だが……」

門野、雛を見る。

雛は黙ってじっと門野を見つめている。

門野「それは既に完成していたのだ……」

雛の心臓を打つ音が響く――。

○住宅街

坂道を登り切ったところにある、古いアパート。
道で見上げていた京子、意を決して中へ。

○アパート

階段を上がり、二階の隅のドア前に向かう京子。

「真柄太郎」という達筆の表札。

周囲を無意識に見回し、躊躇しながらもドアのノブ
に手をかける京子――。

鍵は、かかっていない。

○門野の部屋

表情を消し、雛に正対して立つ門野。

門野「肉体は魂が宿る入れ物——。五感から入った情報は松球の目を経て動物精气によって運ばれる——」

雛「（オフ／冷笑的）デカルトになったつもり？」

門野「動物精气は誤謬だったとしても、脳の働きが微弱な電気信号と化学反応によって引き起こされるのだとすれば、魂無き軀を動かす為はその伝達手段さえ得られればいい」

○アパート室内（真柄老人の部屋）

既に管理人によって片付けられ、段ボール箱に荷物が詰められガランとしている。

暗然と部屋の中央に立ち見回す京子——。

上に重ねられた段ボール、蓋が閉じられておらず、中を少し見せている。

京子、近づいて覗き込み——

京子「——！？（戦慄）」

○イメエジ

陽炎の中の様にゆらめく、真柄老人と雛——。

門野「（オフ）確かに真柄教授は雛の父だった。だが、命を吹き込むばかりでなく、そのまま生き続けさせる為には父親である以上の感情が不可欠だった——」

○門野の部屋

表情なく門野を見つめている雛——。

雛「（オフ）お父さまはもういないのよ」

門野「——だから——、お前ももう存在してはならない」
雛「……」

門野、わざと物体の様に雛の躰を持ち上げ、足でトランクを開き、そこに乱暴に入れて蓋を閉じる。

○旧家の並ぶ路地

トランクを持ち、足早に歩く門野。

雛 「(オフ) お願い、出して」

○橋

真柄老人が倒れていたそこに辿り着く門野。
息を切らし、流れる川を見下ろす門野。

雛 「(オフ) 雛は、今はあなたに思われているから存在しているのに」

門野 「他人の魂そのものの身代わりになど、なりたくない」

雛 「(オフ) いったって死ぬる様に準備しているあなたでも、惜しいものがあるというの？」

▼フラッシュ／門野の部屋にある毒瓶、ナイフ群。

門野 「――(憤怒)」

門野、トランクを川へ投げ込み、即座に駆けだす。

○門野の家／夕刻

急ぎ足で帰ってくる京子。

○同／内

門野の部屋、食堂にも門野と雛の姿がない。

胸騒ぎにやや顔を強張らせ、京子再び出て行く。

○門野の家／深夜

精神も肉体も疲弊しきった門野、格子戸を開き帰ってきた。

門野「——！」

廊下に水が滴っている。

水滴は、ずっと門野の部屋の前まで続いていた。

門野「(まさか——)」

○門野の部屋

飛び込む門野——。その目に入ったのは——、
水に濡れた髪が無残に顔にかかっている、雛。
椅子に座っている。

門野「(恐怖)——(乾いた声)ひ、な……」

雛「——(オフ)雛を、思って……」

門野「(混乱)」

雛「——(オフ)お父さまより、雛の事、思って」

門野「——そうか……、そうだよ……。そうすればいいんじゃないか。そうすれば雛は——誰でもない僕の——」

見つめ合う門野と雛——。

門野、おずおずと近づいて、雛を抱き寄せ——

京子の声「(悲痛)その人形から離れて下さい！」

門野、振り向く。

京子、必死に訴える顔で門野を見つめていた。

京子「これを見て！ この人形は作られた最初、こんなに小さかったんです！」

京子、黄ばんだ一葉の写真を提示する。

門野「——」

真柄老人と雛の写真館での記念写真。雛は今の半分程の大きさしかない。

京子「これは真柄教授が作った怪物なの！ けど心なんて持ってやしない！」

門野「(無感動)何言ってるんだ。君には聞こえなかったのか？ 雛の声を。それに雛は僕を求めて、自分で川からここまで戻ってきたんだ」

京子は涙を浮べ、『違う』と首を振り

京子「自分の格好を見て……」

門野、自分の服に目を落とす。
濡れていたのは雛だけではなく、自分もだった。

○フラッシュ

半狂乱で川の中に半身を漬からせ、トランクを引っ張り上げる門野。

濡れた雛を抱きながら街を歩く門野。

○門野の部屋

引き出しを開ける音に気づき、顔を上げる門野。
門野「——そう、なのか……？（慄然）」

京子、ナイフを手に持ち、雛に近づいていく。

京子「先生、離れてて。この怪物は先生を狂わせる！」

門野「——ま、待て！ 京子！」

京子、悲鳴の如き叫びを上げながら雛に突進し——
倒れた人形の胸をナイフで抉る。幾度も幾度も！
半狂乱で人形を壊し続ける京子。

京子「（泣きながら）先生の事を一番に思っているのは私なのに——
に——私なのに——
留めを刺そうと、一層高くナイフを振り上げる京子。
目を閉じ、叫びながらナイフを振り下ろした。
と、その手応えは歯車ではなく、肉のそれ。

京子「!?!」

雛の上に仰向けで覆い被さり、胸でナイフの刃を受けている門野。

京子「——先生ッ——」

門野「——悪かったよ、京子……」

門野、ナイフを自分で刺した様に柄を持つ。

京子「先生！（『いやいや』と首を振り）」

門野「——だが、僕の魂はこれで永遠に雛とひとつになるんだ」

京子「——（愕然）」

門野の口の端から零れた血が、下にいる雛の頬に落ち、唇の中へ。

まるで雛もまた、自分の内より血を流したかの様に。慟哭する気力もなく立ち尽くす京子。

門野「（モノ）そして、僕は存在する事をやめた。僕はもう、思わないのだから——」

溶暗

○橋／数日後

門野の家であった方から反対側に向かって歩いていく、黒衣の女——、京子。

その手には、大きなポストンバッグが。

雛を持ったまま、京子は何処かへ消えた。

了

註釈

- ※1 ジャケ・ド罗斯はデカルトとほぼ同時代の自動人形作者。
彼が作った筆記するオートマタは「我思わず 故に我は存在せず」という
皮肉を書いたという。（「生きている人形」ゲイビー・ウッド）
- ※2 「役立たずのあやふや」は、パスカルによるデカルト評。
- ※3 雛が喋っている時には口元は見えない。恐らくテレパシー的な言語による。
- ※4 *Cogito ergo sum.* (Latin)
Je pense, donc je suis. (French)
- ※5 ヴィルヴレッシュューは、デカルトと行動を共にした技術者。
現在読める最も信頼に足る評伝「デカルト伝」（ジュヌヴィエーヴ・ロデ
イス＝レヴィス）の記述にも、自動人形を作ったらしいとある（が、フラ
ンシーヌ人形については言及がない）。
- ※6 クア・コギタートウム＝思われたものとしての